



第 41 号

令和 7 (2025) 年 3 月 21 日発行

会 員 募 集 中

年会費 3,000 円

10月以降入会 1,500 円

日本近代絵画の流れ

日本洋画の幕開け

日本の洋画の^{さきがけ} 魁 と言えば、杉田玄白の解体新書の翻訳 (1774 年) に刺激を受け、エレキテルで名高い平賀源内の弟子に当たる小田野直武がその解剖図を描いた時に遡る。もう一人の弟子の司馬江漢は、最初に油絵を描いた人といわれる。幕末に、ペリー来航などから、幕府は外国情報収集のため 1857 年に「蕃書調所」を開所した。後に入所した高橋由一は、その頃、英国から新聞画家として来日していたチャールズ・ワグマンに東京から横浜まで歩いて通って洋画を学んだ。

明治になって欧風文化が流入し、政府は工部美術学校を創立するが、日本画科は含まれていなかった。イタリアからアントニオ・フォンタネージが来日し、浅井忠、小山正太郎などが洋画を学ぶ。フォンタネー

瀬戸内市立美術館館長 岸本 ^{かずおみ} 員臣

ジは 2 年後病気で帰国する。

その後任としてきた教師に生徒は反発し、主だった生徒が退学する。そして山本芳翠、五姓田義松、松岡寿、原田直次郎などの多くの優秀な生徒は渡欧し、アカデミックな画風を中心に学ぶ。高橋由一もフォンタネージに学び、代表作「鮭」を描く。時に西南の役の年 (1877 年) であり、フランスでは印象派展が始まって 3 年後の頃である。

フェノロサの来日と東京美術学校

政府は、1873 年のウイーンの万国博覧会で日本ブームが起こっていたことから、殖産興業政策で輸出品育成のため内国勸業博覧会 (1877 ~ 1903 まで 5 回) を実施し日本の美術分野の高揚を図り、輸出を振興する。その状況下、1878 年に洋風文化振興の流れを変え、洋画・日本画界の長い対立を生むこ

歴・研・展・望

明治維新以降は強い国を目指し、そして、終戦後は豊かな国を目指してきた。これからは、楽しい国、日本を目指したいと石破総理大臣が表明した。見識であると感心した。

最近、ウェルビーイング、ベネッセ、よく生きるという言葉が飛び交うようになってきた。有難い時代に生まれたことに感謝する。これも先人達の艱難辛苦のお陰である。「遊びをせんとや生まれけむ」—『梁塵秘抄』の今様歌であるが、子供たちを見ているとそう思う。

人生の目的は、苦学し、苦勞して立身出世することではなく、自分の個性を自由に発揮することである。かつて、PL 教団の教祖が著書の中で「平和とは個々人の個性が発揮され、それが大きなうねりのような状態になるのが平和である」と定義

していたのを思い出す。私が育った昭和 30 年代はまだまだ貧しい時代だった。が、21 世紀になって快適に生活できる環境が整ってきたと実感する。有難いことである。勿論、生計を立てて生きていくのはそれなりの苦勞、困難はあるのだが。

大学で倫理学の授業を受けた。「よく生きるには・・・」が主題であり、そのよく生きる中身を一番知りたかったのだが、それは個々人によるためか、学問の対象にはならないようだった。時は流れ、絶えず新しくなっている。そのためにも歴史を学ぶ必要があると感じる。最近の若者は歴史を知らない。先人たちの艱難辛苦のお陰で現代があるのに。とはいえ、古い慣習・仕来たりを否定した学生運動華やかなりし頃の卒業生ではあるが。

(会長 楠 敏明)

となるアーネスト・フェノロサが来日する。

フェノロサは、もともと政治・経済・哲学等の教師として東京大学に招聘された。その時、助手として働いていたのが岡倉天心であり、卒業後文部省に勤務し、フェノロサと共に日本文化の重要性を説くことになる。1882 年、フェノロサ、講演で洋画より日本画の優秀さを説き、日本全体が急速な欧化に対しての見直しを始めた時でもあり、また条約改正など国粹主義の流れにも乗り、世に迎えられた。この流れは、欧化の象徴である工部美術学校を 1884 年に閉鎖に追い込むことになった。その後、官営の美術教育は混迷していたが、1887 年に勅命により、東京美術学校が設立され、1889 年に開校する。横山大観、下村観山等が第 1 期生であった。しかし、学科は絵画科（日本画）、彫刻科（木彫）、美術工芸科（漆工、金工）であり西洋画科はなかった。日本画という言葉は、実はこの頃生まれている。

洋画の発展

一方、洋画界はこの動きに対して大同団結し、明治美術会を結成する。浅井忠、小山正太郎など、ほとんどの画家が参加し、1889 年の東京美術学校開校の同じ年に第一回展を開催。日本画、洋画の 2 大勢力が大きな塊となってその勢力を競うことになる。

その 4 年後の 1893 年に洋画界に新風を吹き込み、時代を変える一人の画家がフランスから帰国する。黒田清輝である。元々法律家を目指して 1884 年に留学していた黒田であるが、現地で画才を発揮し、1887 年に画家として生計を立てる事を決意する。当時のフランスは、印象派が話題を集め、次のゴッホ、ゴーギャン、セザンヌ、新印象主義などが注目されていた。

黒田は、アカデミックな古典主義に印象派の外光描写を取り入れた折衷的な画風のラファエル・コランに魅かれた。帰国するとすぐ明治美術会に入るが、従来の明治美術会系の画家との画風の違い等で 3 年後の 1896 年に久米桂一郎らと退会し、白馬会を結成する。白馬会は影を黒ではなく紫で描くこと等から紫派とか新派と呼ばれ、一方の従来の明治美術会の作家は茶色を多用することから脂派とか旧派と呼ばれた。今度は洋画界が 2 つのグループに分かれたのである。

旧派は、浅井忠が海外留学で不在になる等で衰退を余儀なくされ、新しい洋画の模索の時期に入る。そして黒田らの明るい色彩が日清戦争の勝利に合っ

たことや藤島武二、岡田三郎助、和田英作、和田三造等、数ある優秀なブレーンの存在も大きく、新派が主導権を握っていく。

東京美術学校洋画科と日本美術院

一方、岡倉天心を中心にした日本画勢が主導権を握ってきた東京美術学校であるが、1896 年に洋画科が誕生し、1898 年には浅井忠、黒田清輝も教授になる。そして同年、岡倉天心も関わるいわゆる美術学校騒動が起こり岡倉は東京美術学校を辞職。同時に横山大観、菱田春草等も退学した。そして彼らは、東京美術学校の上に大学院のような研究機関が必要であるとの構想から、日本美術院を創設した。横山大観は日本美術院展覧会第 1 回展に、野に下った天心の心中を託した名作「屈原」を出品した。しかし、この時から横山大観、菱田春草を中心にしたメンバーの画家としての試練が 10 数年続くこととなる。大観、春草は外光派の画風にも影響され、それまでの日本画の伝統である輪郭を「線」で描くのではなく、絵の具の濃淡で再現する絵画を模索する。いわゆる朦朧体である。新しい日本画の創作を目指したのである。しかし、思うような評価は得られず、日本美術院は茨城県五浦に移り、院展は有名無実化する。院展の歴史で最も苦しい試練の時であった。この院展第 1 回展が開催されたのが、フランスでモネがジベルニーに引越して睡蓮を描き始めた時である。



横山大観「屈原」

文展の開催

日本画と洋画、またそれぞれの流派にも主張の対立があった日本の美術界に共通の場を設けることを目的として、1907 年に文部省主催の文展（文部省美術展覧会）が開催された。審査員には、岡倉天心、横山大観、下村観山等が選ばれ、日本美術院のメンバーも文展を中心に活動をしていく形となった。この第 1 回展で洋画の最高賞を受賞したのが、無名であった和田三造の名作「南風」である。この頃、西欧では、1905 年にフォービズム（注 1）、1907 年に

キュービズム（注 2）と、マチス、ピカソなどが絵画の新しい画期的な流れを模索していた。国内は、日露戦争の勝利で精神的な抑圧から解放され、国民感情にも大きな変化が起きていた。

白樺派の活動と再興院展

その頃、1910 年に人間の生命を高らかに謳い人道主義、理想主義を標榜する文学同人誌「白樺」が発刊された。メンバーは武者小路実篤、志賀直哉など皆学習院出身であり、自我と個性の尊重を謳った。激動の明治は終ろうとし、大正デモクラシーの時代がすぐそこに来ていた。1912 年に元号が大正に変わると同時に、岸田劉生などが自由・個性の尊重を標榜し、国内初の表現主義ともいわれるヒュウザン会を結成し展覧会を開いた。また注目すべきは、白樺派のメンバーが 1919 年に「白樺」でロダン、セザンヌ、ゴッホ、ゴーギャンなどを最初に日本へ紹介したことであり、美術史的にも大きな役割を果たした。

文展で活動の場を持って活躍していた日本美術院であったが、菱田春草、岡倉天心と日本美術院の核であった二人の死の影響は大きく、横山大観が出した答えは、彼らの志半ばの想いを引き継ぐべく日本美術院を復活させることであった。1914 年に横山大観が文展審査員から除かれたのを機に再興院展を立ち上げた。メンバーも、日本画から今村紫紅、安田靉彦、小林古径、前田青邨、洋画から小杉未醒、村山槐多、萬鉄五郎、彫刻から平櫛田中という次代を担う作家が出品した。

この他にも近代日本画界で際立った個性を持ち、傑出した存在感を示し名品を残した画家がいた。上村松園、速水御舟、福田平八郎である。

清澄で気品あふれる美人画を手掛けた上村松園は、女性として初めての文化勲章を受章し、日本画界の第一人者になった。代表作に「焰」「序の舞」等の名品がある。速水御舟は、写実に装飾性と象徴性を加味した独自の画境を切り拓いた。名作を生むスケール感と質は誰もが認め、将来日本画界を背負う人材と認識した



速水御舟「炎舞」

ことから、40 歳という早逝は惜しまれた。代表作「炎舞」「名樹散椿」等は近代日本画の白眉である。福田平八郎は、伝統ある京都日本画界で異色の存在であり、伝統とモダンを融合させた名品を残した。代表作は「漣」^{さざなみ}「雨」などである。

二科会と国画創作協会

洋画界は、フォービズム、キュービズム等のフランス現地の現状に刺激を受け、帰国する若手が増え、文展の審査への新旧の価値観の違いから 1914 年に文展洋画部に対して二科会が結成された。ここに、再興院展と二科会という在野の大きな核ができた。また、ヒュウザン会を 2 年で中止した岸田劉生は、1915 年に新たに草土社を立ち上げ、名作「切り通しの写生」を発表すると共にこの年に麗子像を描き始め、1929 年に亡くなるまで麗子の 15 歳までを描き続けた。

日本画の京都画壇でも、新しい日本画を目指す若手画家の土田麦僊、村上華岳、小野竹喬らが、文展の旧態依然とした体質に反発し 1918 年に「国画創作協会」を結成する。この動きは、最初から審査委員の選考で紛糾していた文展の体質をクローズアップする事にもなり 1918 年に文展は幕を閉じ、新たに帝展が始まる。しかし帝展にも文展時代と同じ問題が発生し、結局 1937 年に「新文展」という形に落ち着く。同年に第 1 回文化勲章の授与が始まる。受賞者は、岡田三郎助、藤島武二、竹内栖鳳、横山大観であった。一方、1926 年に日本独自の洋画の創造を目指した 1930 年協会が発足し、その潮流は 1930 年の独立美術協会の創立につながった。大原美術館はこの年に開館している。

戦時期から戦後の動き

そして日中戦争、第二次世界大戦が勃発し、様々な会派は中断を余儀なくされるが、国威発揚のため、藤田嗣治、小磯良平、宮本三郎など従軍画家として戦地へ送られる画家もいた。1944 年には東京美術学校の改革が行われた。この年に教授になった安田靉彦^{ゆきひこ}、小林古径、そして奥村土牛^{とぎゅう}、さらに安井曾太郎、梅原龍三郎などは、それまでの上下で縛られていた関係を見直し、自由にやらせる方針を掲げた。当時、生徒だった加山又造は、それが大変嬉しく助かったと当時を回想している。

終戦後、国内への欧米文化の流入で生活環境が急速に洋風化されたことから、その対応に迫られてい

た。床が^{とこ}無い家の増加に対応して縦長画面の軸から横長画面の額へ、そして、壁が黄土色から白い壁の家の増加に対応して白壁に映える絵画へと、大きな変革が生じた。

日本画の五山：東山^{かい}魁夷・杉山^{やすし}寧

戦後のこのような環境の変化の中で、人々の心を掴んだのが、まず東山魁夷であり、病気で少し後に出てくる杉山寧、そして高山辰雄である。彼らは 1908, 1909, 1912 年の生まれで、後に「日展の三山」とも呼ばれ、終生のライバルとなる。

一方、大正を挟んで在野から 1927 年生まれで創画会の加山又造、そして 1930 年生まれで日本美術院の平山郁夫と近代日本画に燦然たる軌跡を残した画家が出てきた。この五人は「日本画の五山」とも呼ばれる。今、個展を最も見たい作家と問われた時、まず筆頭に来るのが東山魁夷であろう。その絵には日本人が生まれて暮らす中で見てきた風景の原点がある。その清澄な画面から人々に日本文化が沁み込み、心の深淵に響き、それが感動を呼ぶのであろう。

魁夷は東京芸術大学を卒業後、ドイツのベルリン大学に留学するが、一方で若くして家族のほとんどを失う。なかなか賞にも縁がなかった。しかし、戦後すぐ、1947 年に「残照」1950 年に「道」という名作を生む。そしてライフワークとなった長野県を中心に取材した山湖、日本海に沿って取材した海景の作品。また「朝明けの潮」などの皇室の作品、更に、約 10 年という歳月をかけ、全精力を捧げての唐招提寺障壁画「濤声」「山雲」「黄山曉雲」を描き上げた。まさに国民画家といわれる魁夷の面目躍如たる作品群である。

一方の杉山寧は、東京芸術大学在学中に帝展特選を受賞、その 2 年後にも再び特選受賞し、その堅牢で完璧な画面構成から天才現わるともいわれた。当時の特選は、画家として保障されたという相当な価値を持っていた。しかし、1938 年に咯血し、12 年の闘病生活に入る。1951 年に衝撃作「エウロペ」で復活。その後、「裸婦」「抽象」にも挑戦し、努力だけでは到達しえない天性の画才を発揮し、理知的な構図、新鮮な色調は天才肌で、見る者を魅了し、画風が異なる東山魁夷と共に、戦後の日本画壇を支えた。

日本画の五山：高山辰雄・加山又造・平山郁夫

高山辰雄は、ゴッギャンを崇拝したことからわかるが、人間の内面を見つめた心象風景に焦点を置

き、心深くに潜む機微に触れる世界を重厚なマチエール（注 3）で描くという表現方法で、洋画に最も近い巨匠画家の印象を受ける。代表作に「聖家族」があるが、人間存在を深く追及する主題は見る者を圧倒する。

加山又造は、初期にはイタリアの未来派、キュビズムなどの影響を受けた動物画で斯界を驚かせたが、続いて描いた豪華絢爛な屏風絵で画壇の地位を確立した。また裸婦、墨絵、北画などにも果敢に挑戦し、日本の伝統的な様式美を現代的な感覚で表現し、「現代の琳派」とも呼ばれた。また対象を描くのは、軸、額、屏風の日本画だけでなく天井画、着物、陶器、車、銅版画（特に最も技術を要求されるメゾチント）、食器、アクセサリーと多様さを誇り、どの種類の作品も最高レベルの技術と格を誇った。

平山郁夫は、岡山では正月の風物詩ともいえる「院展」で最も知られた作家であるが、15 歳の時被爆する。その後、東京芸術大学で前田青邨に師事するが、助手を務めていたとき原爆後遺症に見舞われ、1959 年に玄奘三蔵をテーマに初期の代表作「仏教伝来」を描く。その後 1968 年の中央アジアへの旅行がシルクロードに情熱を傾ける端緒となり、玄奘三蔵の求法の道を通り、日本文化の源流を辿るシルクロードシリーズは、平山の生涯を代表する作品となった。一方で日中の文化交流、世界遺産担当ユネスコ親善大使として尽力した。

戦後の洋画界

洋画に目を向けると、明治以降、西洋の絵画の影響が色濃く出る。元々、西洋では、14～16 世紀に起こったルネッサンス以来の大改革とも言える印象派の出現が、明治維新とほぼ同じ頃である。（第 1 回印象派展の開催は 1874 年）。

それ以降約 50 年の間に、後期印象派、新印象派、ラファエロ前派、ナビ派、分離派、フォービズム、キュビズム、未来派、抽象など、多くの主義主張が出てきた。黒田清輝が 1890 年代半ばに国内で外光派を取り入れて以降、萬鉄五郎が描くゴッホ風、フォービズム風の絵画など、多くの画家が何某かの影響を受けて自分の世界をつくっていき、強烈な個性を持った作家が多く出た。

明治創成期の巨匠を除いて、高いレベルの強烈なオリジナリティーを持った作家を敢えて挙げれば、熊谷^{くまがい}守一、青木^{よろず}繁、萬鉄五郎、岸田劉生、佐伯祐三、藤田^{つぐはる}嗣治、梅原龍三郎、安井曾太郎、小磯良平、坂

はんじろう
本繁二郎などであろう。

熊谷守一・青木繁・萬鉄五郎

最も凄い、唯一無二の画家と問われれば、私は躊躇なく熊谷守一をあげる。「好きな絵も、尊敬する絵かきもいませんが、ピカソは好きな方です」と述べた熊谷は、誰の影響も受けなかった。熊谷守一はピカソより 1 歳半年上であるが、東京美術学校に在籍していた時、クラスメイトの山下新太郎はこのように証言している。「……君が水彩画で裸婦を写生しその人体や背景に鉛筆で三角や四角の幾何学的の線を引き、その線を消したり再び引き直したり……」その時ピカソはまだキュビスムの前の青の時代の時であった。誰も考えつかないことを試みていた熊谷の特質は、熊谷の生涯を貫く柱であった。文化勲章受章が内定した時は「これ以上人が来ては困るから」と、また勲三等叙勲の時も「お国のために何もしていないから」と辞退した。30 数年間、家から出ず、唯一の外出は新聞を取りに行く時との逸話もあり、庭の蟻などの動物を独自の的確な形態で描いた。

青木繁は、東京美術学校に在学中の 1903 年に第一回白馬賞を受賞、その翌年には、名作「海の幸」を描くなど、最初から突き抜けた画才を発揮した。しかし、1907 年の自信作が三等賞であったことから失望し帰郷。故郷で結核にむしばまれ、28 歳で生涯を閉じた。充実した作画の時期は 5 年足らずであった。

萬鉄五郎は、岸田劉生と共に大正期に並び称される画家である。1907 年に東京美術学校に入学し、卒業するまでに代表作「自画像」「裸体美人」を制作し、頂点に達する。デフォルメの特異さが強烈でフォービズム調の強烈な赤と緑の対比色はその後の萬の基調色となる。1917 年に「もたれて立つ人」でキュビスム調の作品を発表。鬼才と言うに相応しい画家である。



萬鉄五郎「裸体美人」

岸田劉生・佐伯祐三・藤田嗣治

岸田劉生は、「日本の油絵」を創り根付かせるといふ基盤づくりに重要な役目を果たした。大正に入るとすぐ、日本最初のフォービズム宣言というべきヒュウザン会そして草土社を作り、ドイツのデュー

ラーへの傾倒から「切通しの写生」「麗子像」と個性が際立つ名品を遺した。

佐伯祐三は、渡仏してすぐ、ブラマンクに「このアカデミズム！」と罵声を浴びる。それから亡くなるまでの 5 年間、自己葛藤の中、自分探しに邁進する。佐伯の生き様が刻まれた作品群に対し、多くの画家が一つの風景画の原点として憧れ目指すのは、佐伯のその冴々とした純粹で美しい眼差しに対してであろう。

藤田嗣治は、1919 年にサロン・ドートンヌに乳白色のマチエールの作品を出品してから一挙に注目を浴び、第一次世界大戦後に狂騒の時代と呼ばれた頃のパリで、エコール・ド・パリの一員として活躍した。帰国して、1933 年から戦争記録映画等異質の仕事をするようになる。戦後、戦争画への斯界からの非難等で失意のうちに離日、フランスに帰化し、二度と日本へ帰ることはなかった。

昭和の画家たち

昭和を代表する洋画家と言え、まず、梅原龍三郎と安井曾太郎があげられる。梅原の画業を端的に形容する言葉として「天衣無縫」がある。20 歳で渡仏してすぐルノワールに師事する。特に、西欧の真似ではなく日本の油絵を作ったと称される「北京時代」の作品は、近代洋画史の金字塔である。一方の安井は、渡仏してからセザンヌの絵に出会う。色面の単純な構成でありながら、的確に対象をつかみ取っている作品に衝撃を受ける。しかしその後、約 10 年のスランプに陥った。ヨーロッパと日本の風土のギャップが原因であった。苦闘の末「外房風景」「金蓉」などの名作を生み、「日本の油絵」を創り上げ、一時代を築いた。豊潤絢爛な色彩と大胆な形態把握の梅原に対し、理知的な画面構成の安井と対照的で、「梅原・安井時代」を築いたのである。

小磯良平は、親しみやすくモダンで気品あふれる女性を描き人気があるが、それは日本人が心の奥に共通に持っている理想の女性像なのだからであろう。無駄の無い卓抜たる筆致は、最高峰の技術を誇り、昭和 16 年の「斉唱」、昭和 49 年の赤坂迎賓館所蔵の「絵画」「音楽」（いずれも作品名）等でその才を発揮した。坂本繁二郎は、久留米で青木繁と同級生であったが、青木が短期間に燃焼したのと反対に外来の諸イズムを仮説として退け、独自の物象把握に基づいて一筋の道を歩んだ。そして近代洋画史に燦然たる足跡を残した。

終わりに

ここで取り上げた巨匠の流れを見てもわかる様に、生活の変化と共に美術品は変わっていった。それは社会に根付いている以上当然のことである。その意味で、時代と共に本流は常に異端にとって替わられる。現在、主流は漫画、アニメ等のポップカルチャーになりつつある。この後は果たしてどんな美術の世界が現れるのか、興味は尽きない。それが美術の面白いところである。

(注 1) マチスなどが起こした絵画運動で、単純化と強い色彩が特徴。野獣派。

(注 2) 対象を複数の視点から幾何学的に捉え、それを同一画面上で再構成する技法の芸術運動。立体派。

(注 3) 素材、材質などによって生み出される美術的效果のこと。

※本稿は、令和 6 年 12 月 3 日開催の歴研サロン講演の概要を演者がまとめたものです。

私と岡山歴史研究会との関わり

顧問 山崎 泰二

岡山歴研と私

私が本籍地を岡山に移した時、岡山人になるためには岡山の歴史を知る必要があると考えた。当時、歴史学者の柴田一先生が歴史愛好家を連れて探訪会を開いており、私も参加して岡山の歴史を学んだ。

今から 15、6 年前、全国歴史研究会の役員が来岡山し、岡山での全国大会開催の要請を受けた。折しも岡山市副市長の天野氏が市長選で敗退し、無職の時期だった。天野氏の実姉、竹本ひろ子氏（徳島在住）も全国歴史研究会の役員をしていた。

そこで、天野氏を会長に、私が副会長になり補佐することで、岡山歴史研究会を立ち上げることにした。柴田先生も顧問を快諾してくださった。平成 22 年に 160 名の会員を得て設立総会を開き、翌年には全国歴史研究会岡山大会を開催した。大会は好評であった。

私の生い立ち

私は昭和 17 年 12 月、鳥取県東伯郡社村（現、倉吉市）で生まれた。太平洋戦争の最中で、父は呉工廠で軍属として働いていた。母は鳥取から私を背負って呉まで面会に行っていた。その頃の思い出を母から何回も聞いて育った。地域では餓鬼大将で、遊び廻った。中学の入学時に学力試験があり、その成績でクラス編成していたようだ。250 名中、100 番までが廊下に張り出された。私は 28 番だった。驚いたことに、学校から帰ると村民の皆様が驚いた表情で歓迎してくれた。高校進学を決めた時、父は

晩酌を止め、学費の貯蓄に努めてくれた。

中学 1 年の時、校内の風紀に青少年赤十字活動（JRC）が効果のあることを知り、中学、高校で JRC 活動を立ち上げた。この活動は当時、左翼系の色彩が強かった。昭和 35 年に安保騒動が起こり、東大生の樺美智子が圧死する事故を身近に見た。JRC 活動は私の人生の指針になり、今日がある。

天職の建築防災との出会い

工業高校を卒業し、大阪で働きながら大阪電気学院の夜学に通った。当時、東京はオリンピックを控えて建設業界が隆盛していた。火災報知器のトップ企業である能美防災に昭和 39 年入社し、東京に移住した。所属は工事部で、施工管理が私の終生の仕事となった。その後平成元年、岡山で独立し現在に至っている。この度の黄綬褒章の受章は、本業の建築防災設備業に対して岡山県の推薦を受け、国から受章されたものである。昨秋、岡山歴史研究会の有志に祝宴を開いていただいた。お礼を申し上げたい。

これからの生き方

私は(有)防災システムを立ち上げ、二人の息子は岡山理科大で情報・通信を学び、当社に入社し 30 年になる。私は名目だけの社長、実質隠居で、主な活動の場は岡山歴史研究会であった。気が付くと 82 歳。これからは気楽な余生を家内と共に過ごしたい。

歴研サロンが開催されました

令和 6 年 10 月 4 日

「漢字から見えてきた日本文化の源流」

会員・三幡鉄道研究会会長 内田武宏

参加者は 19 名。三幡鉄道記録集を発刊したが、三幡の名称の由来が判らないなど釈然とせず、日本文化の源流を探りたいと地名や歴史、和歌などを研究し、『漢字から見えてきた日本文化の源流』（吉備人出版）を出版した。

津田永忠の干拓で沖新田は一番から九番まで整備されていたが、明治になり三番は三幡に変更された。漢字の虫は蛇を表し蛇は蛇行する。三幡は貨物の出入りが激しく、旭川出口の一番、二番を飲み込んだ。ピラミッドを造るための多くのユダヤ人奴隷が逃げ、蛇に咬まれて死んだとある旧約聖書に通じると考えた。「蛇」の漢字とユダヤとの関係が伺えるのではないかな。

私たちは何となく数字を使っているが、奇数に注目する必要がある。旧約聖書には北斗七星の中に神がいるとあり、7 日に 1 日は安息日にすると。ラッキーセブン、セブンブリッジ、七並べなど。日本では、虹も七色、俳句や川柳の五七五、短歌の五七五七七、三三七拍子など。漢詩には五言絶句、七言絶句。ユダヤの奇数文化が中国を経由して日本に届いたのではないかな。暦では五節句。1 月 7 日は七草粥を食べる人日、3 月 3 日は桃の節句、5 月 5 日は端午、7 月 7 日は七夕、9 月 9 日は重陽で菊の節句。法要も初七日、35 日、49 日など、奇数文化が日本文化の源流にある。空海作ともいわれる「いろは歌」を七文字で区切り、下の文字をつなげると「とかななくてしす」。キリストが罪はないのに死ぬという意味が隠されているのではないかな。

日本人の先祖は、大陸で牛や羊を飼いながら日本にきた。ユダヤ人は太陽崇拝の理念を持ち、朝鮮の「朝」も日本の「日」もユダヤ人の太陽崇拝を意味している。日本の国旗の色の「白地に赤く」、これは太陽を崇拝してシルクロードを通り東の国にきた天皇に由来する。羊を含む漢語、「犠牲」「羨門」「羨道」「羊水」等はユダヤ人が考えたのではないかな。喪服の白黒、香典の包みの白黒、棺に白い布をかぶせるのも羊の衣装と思われる。科学的には意味がないが、私たちには大事な習慣となっている。

（本稿は、演者がまとめた講演内容を短縮したものです。）

令和 6 年 11 月 8 日

「吉備の断片」

郷土史研究家 間野行治



参加者 16 名。講演に先立ち、^{はだ}秦歴史遺産保存協議会の依頼を受けて製作されたアマチュア映像作家の高畠正之氏（岡山市）の作品「古代吉備国 秦の郷」（26 分）を上映。標題の「吉備の断片」は、ドローン撮影を駆使した総社市秦のロマンあふれる歴史遺産の紹介から始めた。講演は「正木山を中心とした主な遺跡についての整理と把握（秦氏編）」を主要課題とし、秦氏に言及した。

総社の秦地域には、正木山を中心とした著名な古代遺跡として、全長 70m の前方後方墳の^{いつちようぐろ}一丁坊古墳をはじめ、三角縁神獣鏡が出土したが墳丘状態不明（破壊のため）の秦上沼古墳、家型石棺を有する南北 26m 東西 20m の金子石塔塚（円墳）、横口式石槨を持つ一辺 9m の方墳である長砂 2 号墳などがある。また、県内最古の古代寺院秦原廃寺、さらに六十数基の規模を誇る製鉄遺跡・西団地遺跡群がある。

これらの遺跡に関わった一族は何者だったのか。「総社市埋蔵文化財発掘調査報告書 5 長砂古墳群」（1987 年 3 月発行 総社市教育委員会）によると、「秦原廃寺は、飛鳥期創建とされる県内最古の寺院跡であり渡来氏系氏族秦氏の影響下に造院されたものと考えられている。」とある。

一方、中世の記録、応永元（1394）年の「吉備津宮惣解文によると、「備中国十一郡七十二郷、島二」の

中の下道郡十一郷の秦郷には、「秦郷 小豆八十石 内蔵遠正」とある。なお、秦郷とは、中世に起こった郷名で古代は秦原郷であった。内容は、吉備津神社に各郷の有力者が品物を納め（奉獻し）た記録である。

では、秦郷の内蔵氏とは何者だったのか。「古語拾遺」（807 年成立）によると、雄略天皇の条に、「蘇我麻智宿禰を三蔵（いみくら、大蔵、うちくら、内蔵）に任命。さらに出納（運搬）を秦氏、帳簿を漢氏に決めたと伝えた」とある。つまり、秦氏が大蔵内蔵の出納を管掌する役目を受けたという記録である。

「吉備津宮惣解文」に登場する内蔵氏が、貢物に関連する記事に該当する事から、「古語拾遺」の職掌にも符合している事を考えると、秦郷の内蔵氏は、元来秦氏であった可能性が高いと考えられる。

（本稿は、講演内容を演者がまとめたものです。）

令和 6 年 12 月 3 日

「日本近代絵画の流れ」

瀬戸内市立美術館館長 岸本員臣

参加者 23 名。演者による講演要旨を別途本号に掲載しました。

令和 7 年 1 月 12 日

「安政・昭和地震の史実が語る南海トラフ地震の脅威」

元岡山県地域防災監 土井秀吉

参加者 21 名。「岡山県南部における南海地震の記録」（平成 19 年 3 月岡山県備前県民局発行）に基づき、当時の記録・古文書などの資料により以下のとおり解説した。

地震が少ないといわれている岡山県において、最も警戒すべき地震は南海トラフ地震である。この地震は 100 年から 150 年の周期で発生し、マグニチュード（M）8 以上の巨大地震である。近年では、1854 年の安政南海地震、1946 年の昭和南海地震があり、いずれも岡山平野は甚大な被害を被った。マグニチュードは震度ではなく地震の規模を表す尺度で、マグニチュードが 0.2 大きくなるとエネルギーは 2 倍になる。

岡山平野は二千年前まで海だった場所に沖積と干拓により形成された平野で、地盤が柔らかく地下水位も高いため、液状化が起りやすい地質構造を有している。また、この条件を有している場所に被害が集中している。

昭和南海地震の記録からは、1200 棟が全壊したが、主に干拓地に集中している。また、干拓地の耕地は広域にわたり耕作不能となった。これは地盤の不同沈下と側方流動によるものだが、注意しなければならないのは、「昭和 26 年岡山県地盤沈下耕地事業期成会」の構成市町村の内訳である。干拓地に加え中小河川を有する県南の町村が加入している。つまり、岡山平野の広い範囲において液状化と側方流動が発生しているのである。このことは、昭和南海地震（M8）よりも規模が 4 倍大きい M8.4 の安政南海地震の記録において、赤磐市「花房家文書」や倉敷市「秋岡家文書」で、液状化と側方流動による家屋と耕地の状況の記述により裏打ちされている。

国は、M8～9 程度が想定される南海トラフ地震の 30 年以内の発生確率を、80% 程度に引き上げた。この条件に従うと岡山県南部は、より広範囲に液状化が発生することになる。昭和南海地震から 80 年間の間に、かつての耕地だった場所に我々は市街地を形成してしまっている。我々は、いずれ来る被災を覚悟しながら、自助の方法を考え対策を今から行わなければならない。

講演後、昭和 21 年の岡山測候所の地震被害調査記録に、当時の岡山市の死者・負傷者がゼロで、家屋の被害も著しく僅少というデータは、他の市町村と比べおかしいのではないかと質問があった。記録のデータは公表されたそのものであるが、当時の岡山市は岡山空襲の直後であり、新田開発のあった周辺市町村ほど液状化の被害は少なかったとしても、データの信憑性には疑問が残った。

（本稿は、講演内容を演者がまとめたものです。）

吉備国の語り部の会（出前講座）・令和 6 年度活動報告

岡山歴研では丸谷事務局次長を中心に、公民館等で会員の研究成果を県民に伝える語り部活動（出前講座）を実施しています。以下に令和 6 年度の活動実績を報告します。

講演者	会 場	開催日	演 題
山田良三	倉敷市倉敷公民館	4 月 11 日	備中倉敷学「岡山宗教散歩 岡山の宗教と宗教人」
丸谷憲二	浅越山根町内会会館	4 月 14 日	宇喜多忠家の西大寺八幡山城と松寿寺
丸谷憲二	瀬戸内市中央公民館	4 月 28 日	宇喜多忠家の西大寺八幡山城と軍資金調達
			渡場町の町名の由来と豊臣秀吉の中国大返しの真実
			ハンセン病と永享十二年（1440）備前国西大寺勸進帳
高橋義雄	倉敷市玉島西公民館	5 月 8 日	山田方谷と藩政改革
丸谷憲二	美咲町 宝寿寺	5 月 26 日	吟香生誕記念講演会「宝寿寺会陽の起源について」
高橋義雄	倉敷市玉島西公民館	6 月 12 日	三島中洲と二松学舎・第八十六国立銀行の設立
丸谷憲二	西大寺緑花公園緑の図書室	6 月 16 日	地名学で読み解く 邪馬台国と岡山
板野忠司	岡山市立光南台公民館	6 月 18 日	ここまで変わった日本史教科書
丸谷憲二	岡山市立北公民館	6 月 29 日	吉備国の古代史・上道氏と幡多（波多・秦）氏の謎
富久 豊	岡山市立大元公民館	7 月 5 日	大和政権と吉備国
高橋義雄	倉敷市玉島西公民館	7 月 10 日	川田甕江と川田順
板野忠司	倉敷市庄憩いの家	8 月 16 日	犬養木堂が挑んだ近代日本の光と影
高橋義雄	倉敷市玉島西公民館	9 月 11 日	山田準教授と夏目漱石教授
板野忠司	玉島市民交流センター	9 月 17 日	古代吉備国と謎の秦氏
高橋義雄	倉敷市庄憩いの家	9 月 20 日	銀行、一県一行へ 中国銀行の成り立ち
丸谷憲二	岡山市立西大寺公民館	9 月 21 日	岡山歴史の町しるべ 設置提案審査結果報告
高橋義雄	倉敷市玉島西公民館	10 月 9 日	岡崎嘉平太と日中国交回復
丸谷憲二	倉敷市庄憩いの家	10 月 18 日	吉備の語源について 高島に生える黄色い蕨
杉 嘉夫	岡山市立御南西公民館	10 月 25 日	神戸事件と滝善三郎
高橋義雄	倉敷市玉島西公民館	11 月 13 日	岸田吟香と目薬製造
富久豊	岡山市立御南西公民館	11 月 22 日	道鏡（奈良時代の僧侶）と三人の吉備人
丸谷憲二	岡山市立福田公民館	11 月 25 日	造山古墳に埋葬されているのは誰か なぜ石棺に阿蘇の石が使われたのか
板野忠司	岡山市立御南西公民館	12 月 20 日	書き変わった日本史教科書
杉嘉夫	倉敷市庄憩いの家	1 月 17 日	池田綱政と後楽園 後楽園造営の経緯
丸谷憲二	玉島市民交流センター	1 月 21 日	地名学で読み解く 邪馬台国と岡山
山田良三	倉敷市庄憩いの家	2 月 21 日	法然上人

岡山歴史研究会の活動内容は、残念ながらまだ多くの県民の方には知られておりません。会員の皆様には、ぜひ友人、知人等への PR 活動をお願いします。

語り部の会では新しい登録講師を募集しています。会員の皆様からの積極的な御応募をお待ちしております。

語り部の会についてのお問い合わせは、**丸谷憲二事務局次長**まで。

電話：090-6837-1615

メールアドレス：yanagirousi@gmail.com

秋の探訪会「陰陽師・安倍晴明ゆかりの地 浅口市」報告

事業委員長・会員 古川 智

はじめに

10 月 19 日（土）に、陰陽師・安倍晴明ゆかりの地である浅口市において、秋の探訪会を開催した。晴明は、平安時代中期に活躍した陰陽師で、天文道を学び伝え、天皇をはじめ諸家の陰陽道諸祭や占いに従事し、名声が高かったといわれている。浅口市内には、占見地区や大浦神社など晴明ゆかりの伝説地が多く残っている。

また、金光教本部境内と金光教門前町の大谷地区を訪れ、施設と歴史・伝説を見聞した。参加者 20 名で金光駅前を貸切バスで出発し、午前中は占見地区と金光教本部境内、午後は大谷地区と大浦神社を訪問したので、その内容を報告する。

1. 占見地区

占見地区にある大宮神社までバスで移動し、岡山歴研会員の金光英子氏の案内により、安倍晴明の霊墳、道満池の坊主岩、芦屋道満の塚、月見岩などを見学した。地元で安倍晴明の墓などを管理されている赤沢氏が金光駅前から同行し、保管されている明治 41 年 9 月に拵えた晴明霊神幟を広げて説明された。



安倍晴明の霊墳

2. 金光教本部境内の施設

バスによる移動で金光教本部広前会堂に到着し、金光教の歴史について説明を受け、御神前、御霊前に参拝した後に地階休憩所において、金光英子氏から安倍晴明の伝説を基にした紙芝居の紹介があった。その後、本部境内の修徳殿講堂、立



晴明伝説の紙芝居の紹介

3. 大谷地区

金光教門前町の大谷地区に移動し、つちや食堂で昼食となり、参加者の多くは名物の館かけかつ井や五目そばを注文した。食事後には、豪雨の中、



金光教本部御門で記念写真

金光饅頭店や酒造店を見学し、近代建築家の江川三郎八の設計による建築物を中心に古い門前町のまち歩きを行った。



江川三郎八設計による建築物(1)



江川三郎八設計による建築物(2)

4. 寄島町 大浦神社

金光教本部境内からバスで寄島町の大浦神社まで移動した。拝殿において金光英子氏から安倍晴明が三郎島に応神天皇・仲哀天皇・神功天皇の三神を氏神様として祭ったとの説明後、小川禰宜からも青佐山城主の細川通董が永禄 2 年に三郎島から現在地へ遷したことなどの紹介があった。その後、小川禰宜から参加者へのご祈祷を受けた。

おわりに

午後 2 時に金光駅前に戻り、解散となった。あいにくの雨で徒歩での移動が大変であったが、金光英子氏には企画作成からお世話になり、興味深い説明をいただき、感謝を申し上げたい。

秋雨や 安倍晴明の 煙り址 登志生
門前に 神露なる酒 待つ夜食 登志生

春の探訪会「秦氏ゆかりの地 播州・赤穂」

春の探訪会「秦氏ゆかりの地 播州・赤穂」を以下の要領で開催します。

渡来人である秦氏の族長的な秦河勝が開拓した播州・赤穂の千種川流域には、秦氏を祭神とする大避神社が30社以上あります。今回は、この点在する神社や史跡を赤穂市「秦氏を学ぶ会」副会長の案内で探訪する企画です。多数のご参加をお待ちしています。

1. 日 時：令和7年4月6日（日） 7:50～16:00 小雨決行
2. 集合場所：JR岡山駅 西口 駅駐車場 7:50 集合
3. 参加費：8,000円（貸切バス料金5,000円、昼食代2,000円、謝礼等1,000円）
4. 昼 食：創作料理 二条 赤穂市坂越788
5. 参加募集数：約25名（先着順）
6. 案 内：野村勝美氏（赤穂市「秦氏を学ぶ会」副会長）
7. 主なコースと探訪予定地

- ・ 8:00 岡山駅駐車場 貸切バス出発
- ・ 9:00 赤穂市役所 野村氏乗車
- ・ 9:30～10:00 上郡町 大避神社（竹万）
- ・ 10:10～11:00 赤穂市立有年考古館（有年櫓原）
- ・ 11:10～11:30 赤穂市 大避神社（中山）
- ・ 11:40～11:50 赤穂市 大避神社（木津）
- 赤穂市 木津大工村 太子堂 車窓からの見学
- ・ 12:00～12:50 昼食 創作料理 二条（生島の対岸）
- ・ 13:00～14:20 赤穂市坂越 大避神社（坂越） 生浪島堯 宮司の説明
- ・ 14:30～15:00 赤穂市坂越 海の駅しおさい市場
- ・ 16:00 岡山駅駐車場 解散

8. 申込及び問合せ先 古川 智（事業委員長）

参加ご希望の方は、以下のいずれかの方法で氏名、住所、電話番号をご連絡ください。（キャンセルの場合は、4月3日（木）までにご連絡ください。それ以降はキャンセル料をいただきます）

電 話 080-1931-7463 「SMS（ショートメール）も可」

メール s.furukawa@seibuct.jp

岡山歴研サロン 今後の予定

岡山歴研では原則として月1回、会員や外部から講師を招いて、研究発表・交流の場としてのサロン会を開催しています。令和7年5月～8月までの予定は以下の通りですので、多数の御出席をお願いします。会員以外の受講も歓迎します。（講師の都合等、やむをえない事情により、変更することがあります。）

開催場所：ゆうあいセンター（きらめきプラザ2階、岡山市北区南方、駐車場あり）

開催時間：13時30分～16時 **受講料：**1回あたり500円（当日徴収）

5月31日（土）

「実現した市町村合併・消えた百万都市構想」

講師：元岡山県合併推進室長 角田保彦氏

6月28日（土）

「聖武天皇大嘗祭木簡出土の平城京と備中国」

講師：岡山歴史研究会顧問 野崎 豊氏

7月9日（水）

「池田忠雄と伊賀越の敵討ち」

講師：岡山歴史研究会会員 杉 嘉夫氏

8月6日（水）

「岡山の夏目金之助（漱石）」

講師：岡山市立御南西公民館館長 熊代正英氏

岡山歴史研究会 令和 7 年度定期総会の御案内

下記の通り令和 7 年度総会を開催しますので、多数の御出席をお願いします。

総会終了後、同じ会場で第 1 回秦氏サミットが開催されます。

日 時：4 月 26 日（土）9 時 30 分～10 時 30 分

場 所：国際交流センター 8 階イベントホール（岡山駅西口徒歩 3 分）

（岡山市北区奉還町 2 丁目 2-1 電話：086-256-2905）

第 1 回秦氏サミット

上記定期総会に引き続き、秦・長宗我部氏の会全国連合会の主催で開催されます。

（長宗我部顕彰会、秦歴史遺産保存協議会、岡山歴史研究会との共催）

第一部 全国連合会総会：11 時～12 時

第二部 記念講演：13 時～14 時 30 分

演題 「浦島伝説とユダヤ」

講師 東北大学名誉教授 田中英道氏

討論会：15 時～16 時 30 分

ニュース

山崎泰二氏の黄綬褒章受章祝賀会を開催

岡山歴研顧問（前副会長）の山崎泰二氏が黄綬褒章を受章され、令和 6 年 11 月 21 日にピュアリティ真備で、会員有志による祝賀会が開催されました。参加者は 15 名でした。

三幡鉄道研究会が鉄道史学会の特別賞を受賞

会員の内田武宏氏が会長を務める三幡鉄道研究会が、鉄道史学会（東京）の「第 15 回住田奨励賞」の特別賞を受賞されました。県内団体では初めての受賞です。

「楯築ルネッサンスフォーラム 2025」が開催

表記フォーラムが、令和 7 年 1 月 18 日に山陽新聞社さん太ホールで開催されました。全国から約 240 名が出席し、岡山歴研からも 5 名が参加。当日は、野崎貴博岡山大学助教の講演や、人気古代史ユーチューバー 4 人によるライブフォーラムなどがありました。

編集後記

顧問で岡山歴研を立ち上げた功労者の山崎泰二氏が、黄綬褒章を受章された。長年続けられた建築防災の仕事が評価されたものであり、心よりお祝いを申し上げたい。また、運営委員の内田武宏氏が会長の三幡鉄道研究会が、鉄道史学会の特別賞を受賞されたこともまことに喜ばしいことであり、長年の活動に敬意を表したい。

今号には、瀬戸内市立美術館館長の岸本員臣氏の「日本近代絵画の流れ」という論考を掲載した。昨年 12 月開催の歴研サロンの講演をわかりやすくまとめたものであり、明治以降の日本美術の全体的な流れが俯瞰できる力作になっている。今号は印刷をカラー印刷にして、掲載された絵画作品の雰囲気を味わってもらえるようにしてみたが、感想をお寄せいただければありがたい。

その他にも 3 編のサロン報告を掲載したが、いずれも演者による概要報告である。その中で、土井秀

吉氏による「安政・昭和地震の史実が語る南海トラフ地震の脅威」には、近い将来必ず起きるとされる南海地震への備えの必要性和、特に干拓地など軟弱地盤が多い県南部において、自分の命を自分で守ることの重要性をあらためて認識させられた。

また、春の探訪会や令和 7 年度総会の予定等も掲載した。新型コロナウイルス以降、総会への出席者が減少しているが、ぜひ多数の御出席をお願いしたい。（井上知明）

発 行 岡山歴史研究会

会 長 楠 敏明

編集長 井上知明

事務局 〒701-0101 倉敷市日畑825 楠 敏明方

電 話 090-7894-5519

メール aquatechnos@trad.ocn.ne.jp

ホームページ <http://b.okareki.net/>